

を注ぎながら、漢字反転現象とその定着時期、その言語内的・外的理由を考えてきた。本稿では字順定着時期をほぼ定位できたようにおもうが、その言語内的理由として諸家が指摘した因由をこえるものを今回提出できえなかった。ただし、これは反転語全般に関することではなく、当該対象品詞語に限られたことによるのかもしれない。さらに複合動詞や品詞を異にする二字漢語に考察を及ぼさねば、軽々に断を下すわけにはいくまい。研究の展開からして、次稿は複合動詞を俎上にあげることが私に要請される。

註

- (1) 尾崎雄二郎・島津忠夫・佐竹昭広著『和語と漢語のあいだ 宗祇百韻会読』二六二頁、一九八五年、筑摩書房。
- (2) 村上春樹「将門記の文体」(古典遺産の会編『将門記 研究と資料』所収)、一九六三年、新読書社。
- (3) 張錫厚『王梵志校輯』五八頁、一九八三年、中華書局。
- (4) 拙稿「和漢比較漢語致——反転語をめぐって——」(いわき明星大学人文学部研究紀要十三号、二〇〇〇年三月)。
- (5) 『元稹集』上・下、一九八二年、中華書局。
- (6) 『東国李相国集』卷六・九、一九八二年、ソウル明文堂。
- (7) 中村璋八・島田伸一郎著『田氏家集全釈』(一一二頁、一九九三年、汲古書院)では、押韻のために字順を変えたのだろうかという。
- (8) 「莊嚴」が一般化した近代において、極めて稀な例「嚴莊」が、幸田露伴『連環記』に「一山の僧侶、翼從甚だ盛んに、それこそ威儀を嚴莊にし、飾り立てて鍊り行つた。」(岩波文庫、二四頁)とある。筆者はこの条を偶目発見して、独りほくそえんだのも束の間、『日本国語大辞典』(二版)の「げんそう(嚴莊)」項に既に採録されていたことを知った。ただ「杜」と「莊」との関係になんらの言及もない挙例はいかがなものか。
- (9) 崔英成編『崔致遠全集』②、三五一頁、一九九九年、アジア文化社。
- (10) 『明解国語辞典』(四版)も同じく、「くしん」は「苦心」のみで、「苦辛」をみない。その反転語は登載されていない。
- (11) 許興植編『韓国金石文』所収、一九八四年、亜細亜文化社。
- (12) 『崔致遠全集』②所収。
- (13) 富永一登著『文選李善注の研究』三七七頁、一九九九年、研文出版。
- (14) 『崔致遠全集』①所収。
- (15) 拙稿「将門記の表現」(『軍記文学の出版——初期軍記』所収、二〇〇〇年、汲古書院) 参照。
- (16) 峰岸明著『平安時代古記録の国語学的研究』八四頁、一九八六年、東京大学出版会。

- I型 苛酷(上―去) 苦痛(上―去) 辛酸(平―平) 清潔(平―入) 莊嚴(平―平) 平安(平―平) 平均(平―平・上) 平和(平―平・去) 大都(去―平)
- II型 險難(上―平・上) 辛苦(平―上) 珍奇(平―平) 悉皆(平―入) 相互(平・去―平)
- III型 暗愚(平―平) 健康(去―平) 峻嚴(去―平) 明朗(去―上)

I・II型において、「大都」を除くと、ほぼ四声順であることがわかる。「和平」が優位であっても声調は変わらない。「大都」は唐代語で口語的な語という特殊性によるか。III型については「暗愚」と和製漢語「健康」を除くと、「峻嚴」「明朗」の二語が残るのみであるが、いずれも後発語であることに留意したい。列島における四声意識がどの程度知識人に浸透していたか、がこれを左右するかも知れない。少なくとも本稿で扱った語に関しては、I・II型の差違はあれ平安期あたりまでは、漢土で指摘された声調順に従った字順といえるか。

字順定着を促す言語的理由として、声調以外に何が考えられるだろうか。まず思いつくのは、漢文文献以外に当該漢語が用いられているか、あるいは訓読された形、すなわち訓読語として定着しているかによって、その程度を窺うことができそうである。ところが、既に峰岸明氏が指摘しているように、仮名文学語・漢文訓読語・記録語の三位相が顕著な平安期である。¹⁶⁾当該漢語の訓読例を捜し出すことができても、そこには一種の偏向を容認せざるをえない。それを承知で、いま『今昔物語集』から該当する字音語・訓読語を拾ってみると、次のようである。

I型 皆悉 莊嚴 平安

II型 相互 辛苦

言語外の理由として「典故」ある漢語、あるいは慣用句中の漢語が考えられるが、これらはなほだこころもとないものがある。確かに、上記『周易』の「天下和平」の「和平」は、「典故」ある漢語といえるが、他のものとなると、果して「典故」語として扱ってよいものか判断にまようものがある。それでも名詞の場合はよいが、こと形容詞・副詞となると「典故」を云々するに困難をおぼえる。

筆者は漢語字順定着として(1)声調順、(2)訓読語の存否、(3)典故の有無に基準を考えたのであるが、漢語の性質にもよるのか、(2)(3)は小稿であつかった漢語には適用できなかった。

おわりに

漢語の字順反転現象について、宋の胡仔編『苕溪漁隱叢話』巻二十七、四十で既に言及している。

芸苑雌黄色云、古人詩押字、或有語顛倒而於理無者(巻二十七)すこし時代降るが、王楙(一一五一―一二二二)の『野客叢書』にも、

漢皇詩話曰、字有顛倒可用(巻二十八)

とあり、反転現象への留意が窺われる。漢土の知識人は、この現象の主因は漢詩の押韻上の制限による反転と考えていたようだ。列島における反転言及となると、だいぶ遅れて津阪孝綽の『夜航詩話』(天保七年―一八三六)刊)にみえる。津阪は唐宋詩から反転語の採拾をよくなし、「文字有顛倒可用」(巻五)として百七十語を越える例を紹介している。例示としては漢土文献をはるかに凌ぐものがある。ただ反転因を漢詩が対象ということもあるのか、漢詩の押韻制約によるものと考えていたようだ。

筆者は、近年の成果と宋人の筆記小説にまみ見いだせる断片とに意

島文献で目睹することはなかったが、朝鮮文献『東文選』(巻九十一)にみえるところからしても、「康健」が当代では一般的であったと思われる。因みに「健康」は「康健」の反転とみられるが、洪邁(一一二二—一二〇二)の『夷堅志』に「清健康寧」(丁巻第二十)とあるところから、その成立は漢語縮約による可能性も考えられる。因みに、『夷堅志』には「康健」例をみないが、類似語として「健勇」(支甲巻三)「勇健」(丁志巻二)「健壯」(補巻巻五)「壯健」(支丁巻八)「強健」(補巻巻二十三)がみえる。「勇健」は『今昔物語集』(巻二—三十)に、「強健」は『本朝文粹』(巻四)に存する。

「峻巖」「巖峻」は『史記』に両用が確認されているが、列島となると明治期文献(『日本国語大辞典』)の挙例となる。管見の及んだところでは、空海の『性靈集』(巻二)をはじめとして『政事要略』(巻五十一、天曆四年二月十日)、『凶書寮本類聚名義抄』に、その例をみる。鎌倉期に入っても、後鳥羽天皇宣旨(建久二年三月)に拾うことができる。一方、「峻巖」は採擷できない。ところが、現代では「峻巖」の語は聞くものの、その反転語をきくことはない。

現今では「明朗」を知っているが、「朗明」の存在をしる人は稀だろう。ところが漢土では唐代までには両語の存在が確認されている。列島文献では奈良・平安初期には例をみないが、小野宮実資の『小右記』(長和四年九月十九日、治安三年十一月十日条)や菅原為長の『文鳳抄』にひろえる。「明朗」となると採例がむずかしく、真言宗僧覚鑑(一〇九五—一一四三)の『心月輪秘釈』に例が採擷できる程度である。

以上、「反転語」の文献史的出現と使用状況を概述したことで、定着時期がほぼ明らかとなった。その事実をふまえたうえで、なぜ如上の字順に定着したのか、その言語内的理由を考えねばならない。

列島漢語の字順定着について — 反転語を中心として —

二 字順定着の言語的理由

中川正之氏は「漢語の語構成」(大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』、一九九七年、くろしお出版)、「鏡像語を作る2、3の要因」(佐治圭三教授古稀記念記念論文集編集委員会編『日本と中国 ことばの梯』、二〇〇〇年、くろしお出版)で、中国と日本における反転語における字順定着の優位性を提出された。また、村田忠男氏は「笛はなぜ「ひゃらぴー」と鳴らないのか」(『言語』二〇〇一年八月)で、英語における等位構造表現の順位優位性を紹介された。当面の問題としては、中川氏の提出された「文法的同資格並列語」における優先順位の検証にある。氏によれば、日中両語において、次のような優先順が考えられるという。()は例を示す。

(中国語)

一、旧入声は後(死活)

一、上をあらわす要素は前、下は後(のぼりおり)

二、同一行為の場合は継

二、音節の少ない要素は前、おい音節は後(うけわたし)。

起順(収支、それ以外

母音音節は前、子音音節は後(あめかせ)。

は接近が前、離脱が後

(来去)

三、声調順(右左)

三、離脱が前、接近が後(かしかり)

小稿の対象とする時代は奈良・平安・鎌倉初期であるから中国王朝では唐・五代・北宋にあたる。それ故、まず点検すべきは「声調」であろう。これまでとりあげた反転語の四声を掲出してみよう。

も、その反転語はみいだしえないのである。列島文献にあつて「互相」は、すでに法進の『沙弥十戒并威儀経疏』(巻四)に、平安初期の空海『十住心論』(巻二)をはじめとして円仁『顕揚大戒論』巻七、円珍『妙成就記』、恵心『横川首楞院二十五三昧起請』、成尋『参天台五台山記』第七など、仏家の著書に用いられている。ところが、在俗者のものとなると、例えば平安古記録にその例をみず、わずかに鎌倉初期の『玉葉』(建久九年六月十六日条)の一例を見るにすぎない。一方、「相互」となると、『天徳内裏歌合』(九六〇年)の「此間相互詠揚」をはじめとして『雲州往来』『江談抄』『注好選』『袋草紙』に頻見する。記録類を検すると、『権記』(寛弘三年八月廿日条)『中右記』(承徳二年十月十六日条)『長秋記』(元永二年十一月廿三日条)『永昌記』(天応元年三月十六日条)『兵範記』(仁平四年四月十八日条)『台記』(保延二年十二月十三日条)『山槐記』(仁安二年三月十六日条)『玉葉』(承安二年九月廿二日条)に例を拮据できる。如上の状況から、「相互」は列島創製語ではないか、考えられる。陳力衛氏は和製漢語とされたのは、このような手続きを経て、はじめて容認できる。

ところで、筆者はこれまで所掲漢字語のよみについて言及を避けてきた。漢土所生の漢語なら、当然字音でよまれるはずである。いわゆる「字音語」である。ところが、訓読が定着すると、両用のよみが併存することになる。例えば上記の「互相」「相互」であるが、原則的には「ゴサウ」「あひたがひ(に)」と読み分けすべきであろうが、実際は截然としていないのが実情のようで、「相互」に転換可能の様相を呈していたようだ。それは、『今昔物語集』を閲すると、

互二相ヒ思ヘル事无限シ(巻五一一)

相ヒ互ニ鉢ヲ曳シロウ(巻三二二)

相ヒ互ニ可語シ(巻十一三)

などに遭遇するからである。従つて、『袋草紙』の「彼此相互難陳」(上巻)や「此間相互詠揚」などを、果して「あひたがひに」と訓読してよいものか、字音・字訓のいずれを採るべきか惑うところである。

III 後発型

この型は平安期までは一方のみ存していて、その反転語は鎌倉期以後に生じたと考えられるものである。

「愚暗」「暗愚」についてみる。「愚暗」は漢代の『論衡』にみえ、「暗愚」は時代降つて宋人梅堯臣の詩『漢語大詞典』にあらわれる。既刊辞典の出典によるかぎり、「暗愚」は後発語といえる。朝鮮文献では「愚暗」を『東国李相国集』(巻二十八)にみるも「暗愚」例をみいだせない。列島では『類聚三代格』(巻十六、貞観十五年正月廿三日)『政事要略』(巻五十三、貞観十七年八月廿二日)、『平安遺文』(四五一号、寛弘六年)、一三四六号(嘉保二年)、『玉葉』(寿永三年二月十六日条)、『平家物語』(巻二)に「暗愚」例を採拾できる。また割裂の例として「愚痴暗鈍」(『大法師浄蔵伝』『明義進行案』『愚痴闇鈍』(『興禪護国論』)もある。一方、「暗愚」は建久二年(一一九一年)後鳥羽天皇宣旨が最も古い例のようである。後発であつても、この「暗愚」は福沢諭吉の『明治十年丁丑公論』『女大学評論』から丸山眞男著『福沢諭吉の哲学他六篇』にいたるまで、近現代の文献にひろく拾うことができる。後発語が威勢をもった典型ではなからうか。

「健康」については諸家の言及するところである。いま荒川清秀氏の「健康」の語源をめぐって(『文学・語学』平成十二年三月)によれば、「健康」という語が幕末の日本で蘭学者によつてつくられたという結論はおそらく正しく、その点において諸家一致している。すなわち「康健」の後発語が「健康」ということである。平安期までの列

『日本三代実録』(巻四)『本朝文粹』(巻十二)に例をみる。この拮抗状況にあって文献に顕著な傾向の存するものがある。例えば『日本三代実録』には「悉皆」例がみえない。対する『延喜式』では巻四十六例を除くと殆ど「悉皆」が用いられているのである。平安末期になる『扶桑略記』では「悉皆」三例に対し「皆悉」が二〇例と『日本三代実録』に近い傾向をしめしている。因みに六国史にあっては、『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』で併用されているが、ただ『日本文徳天皇実録』だけは「悉皆」は一例のみである。これは如何なる理由なのか、いまだ十分な考えに及んでいない。「悉皆」「皆悉」のほかには平安文献には類似する反転語群が存在する。「皆咸」「咸皆」「皆尽」「尽皆」である。『大漢和辞典』では登載されていないが、『漢語大詞典』で「咸皆」が『百喻経』、「尽皆」が『三国志演義』の例をあげ収載した。ただし、その反転語は載せられていない。管見に及んだものとして、『敦煌変文』には「咸皆」(巻四、五)、「尽皆」(巻五)が、唐人成玄英(七世紀中頃)の『南華真經注疏』(巻七)に「咸皆」が、『祖堂集』(九五二年)に「尽皆」(巻十六)がある。「皆咸」は既に列島に将来された『杜家立成雜書要略』に、そして列島文献『日本書紀』(巻廿九)をはじめとして『日本後紀』(巻十二)『類聚国史』(巻百五十九)『延喜式』(巻十二)『政事要略』(巻五十九)に至るまでみいだせる。「咸皆」もこれに劣らず、『日本書紀』(巻十四)『続日本後紀』(巻十一)『日本三代実録』(巻三十八)『類聚国史』(巻八十六)『政事要略』(巻五十九)『朝野群載』(巻十一)から仏家の手になる『入唐求法巡礼行記』(巻二)『往生要集』(巻上)など多くの文献にみいだせる。鎌倉期に入ると、『玉葉』(承安五年九月三日条)、『扶桑略記』(第二)、栄西の『興禪護国論』(巻下)に「咸皆」がもちいられている。漢土にあっては、『敦煌変文』(巻四、

列島漢語の字順定着について ― 反転語を中心として ―

降魔変文、巻五仏説阿弥陀経講経文)が「咸皆」のみであるが、贊寧の『宋高僧伝』では両用(巻八、巻十二)がみられる。

「尽皆」は『敦煌変文』(妙法蓮華経講経文二)、『敦煌写本壇経』、『祖堂集』(巻十六)にみいだせ、使用時期も『三国志演義』をだいぶ遡らせることができる。列島文献では『法曹類林』(巻百九十二、延喜五年六月廿八日条)『扶桑略記』(第三十)で採録でき、その反転語「皆尽」も『日本後紀』(但し、本文は『日本紀略』前篇十四所収、淳和(天長元八月乙酉条)にみえるから、漢土文献をさらに遡ることができる。因みに、「尽皆」は富永一登氏によると、当時の「口語的表現」のことである。^⑤

「互相」と「相互」について、伊地智善繼編『白水社中国語辞典』(二〇〇二年)に次のような「語法」注記がある。

相互は互相を比較すると、互相の品詞は副詞、相互の品詞は形容詞(非述語形容詞)であり、連用修飾語として用いた場合には副詞とみとめられ、両者は互いに置き換えが可能である。しかし相互は連用修飾語として用いるほかに、名詞を修飾したり(例えば、相互関係・相互作用)、連体修飾語としても(例えば、相互的關係・相互的問話)用いる。また互相「之」間という言葉もあるが相互「之」間の方が一般的である。

このような「相互」は、漢土文献でいつごろから現れたのであろうか。『漢語大詞典』では近代例を載せているところからすると、その成立は唐・宋期を降ることを暗示する。事実、筆者の調査した限りにおいても「互相」を採拾できても、「相互」は皆無であった。同じことが朝鮮文献についてもいえる。「互相」は崔知遠の「有唐新羅国故知異山雙谿寺教誡真鑑禪師碑銘并条」唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚伝^⑥、『三国史記』(巻五、四二)、『東文選』(巻七十九)にみえて

の堅固さに退隱を余儀なくされたようだ。

「辛苦」については先出の『唐五代語言詞典』や『敦煌文献語言詞典』（蔣礼鴻編、一九九四年、杭州大学出版社）などが王梵志詩をあがっている。その反転語「苦辛」は、向熹著『簡明漢語史』（上、一九九三年、高等教育出版社）によれば、「辛苦」よりその成立は遅れ、「苦辛産生于六朝」として『顔氏家訓』をあげている（五六九頁）。筆者が『敦煌変文』を調査したところ、「辛苦」三二例に対して「苦辛」は一二例あり、新語といえよく対抗しているといえる。朝鮮文献では「谷白大安寺広慈大師碑」（九五〇年）と『三国史記』（卷六）に「辛苦」、崔知遠の『孤雲文集』（途中作）「春日邀知友不至因寄絶句」に「苦辛」例をみる。列島では「辛苦」が『常陸風土記』『万葉集』（卷五）などの奈良期文献、空海『三教指帰』（下巻）、『都氏文集』など平安初期文献から末期の『政事要略』（卷五十七）『朝野群載』（卷廿六）『本朝世紀』（第三十）『日本紀略』（前篇十四、弘仁元年九月丁未条）などあまねく見いだせる。一方の「苦辛」は後発語のようで、上限は『十住心論』（卷一）や『凌雲集』、紀長谷雄（八四五〜九二二）詩（『本朝文粹』所収）などから平安初期のようだ。両語は拮抗状態にあったようで、『朝野群載』（「苦辛」卷一、三）や『小右記』（「辛苦」長和四年閏六月十九日条、「苦辛」永祚元年五月七日条）に併用例がみられる。ただ辞書においては『色葉字類抄』に「辛苦」があり、「苦辛」は鎌倉期になる『伊呂波字類抄』に「辛苦」とともに併載され、遅れる。『今昔物語集』では「辛苦悩乱」なる成句が多用され（卷一―三十八など）ていて、「辛苦」優位である。

「珍奇」「奇珍」について、既刊辞書では唐代以前文献例が示されている。筆者が目録しえた唐代文献では「珍奇」が優位のようにみえる。列島文献では『続日本紀』の「珍奇」が初見のようであるが、平安初

期の空海『性靈集』にも「珍奇」（卷五）がある。現在からすると「奇珍」例は少ないような印象をあたえるが、実際はそうではなく、『扶桑集』（源英明）、『本朝文粹』（卷一、大江以言）『本朝統文粹』（卷一、藤原敦光）などにみいだせ、「珍奇」と拮抗していたことがわかる。

同じ程度副詞「皆」「悉」を重ねた「悉皆」「皆悉」は、近年の『漢語大詞典』にいたって両語が登載された。『大漢和辞典』では「皆悉」が落ちている。『漢語大詞典』には五世紀文献『百喻経』や敦煌曲子詞例をあげる「悉皆」と、『後漢書』から「皆悉」例をあげる。漢土にあつてこの両語はどのような状況にあったのか。いわゆる外典ではその傾向を伺いにくい（この語に位相性をおびているとも考えられる）、漢訳仏典には両語が頻見され、その状況がわかる。例えば義浄（六三五〜七二三）訳『金光明最勝王経』には、「悉皆」一一例、「皆悉」一一例と、ほぼ拮抗状態である。例えば、「亦如未来諸大菩薩修菩提行所有業障悉皆懺悔、我之業障今亦懺悔、皆悉発露不敢覆蔵」（卷三）のごときである。時代降って十世紀文献の『敦煌変文』あたりにいたると、「悉皆」一五例に対して「皆悉」二例と、「悉皆」が断然優位の様相を呈している。朝鮮資料では慧超（八五〇没）の『往五天竺国伝』をはじめとして、『三国遺事』（卷二）『東文選』（卷二十三）など「悉皆」のみで「皆悉」例をみない。ただ李奎報（一一六八〜一二四一）の『東国李相国集』では両語の使用（卷十二、卷二十七）がみとめられる。漢土同様、韓土でも「悉皆」優位に転じている。列島となると、八世紀の『日本書紀』から拮抗状況にある。「悉皆」は『播磨国風土記』『出雲国風土記』『続日本紀』（卷三十五）、「皆悉」は『万葉集』（卷二）『出雲国風土記』『続日本紀』（卷三十五）、平安期に至っても前者が『日本文徳天皇実録』（卷六）『類聚国史』（卷百六十五）『本朝文粹』（卷二）、後者は『日本後紀』（卷二）『続日本後紀』（卷四）

『日本古典文学大系』（一九六五年、岩波書店）及び『弘法大師空海全集第六』（一九八四年、筑摩書房）で当該箇所をみると、ともに「都大道場法壇の会を立て」とある。前者では底本（一二二三年写）に「都」を「スベテ」と訓じてることを紹介するも、他本に従って採用しないと明記している。ただ「諸尊をすべて集合した曼荼羅をまつた壇場を建立しての意か」として、その解釈に不明点のあることを示唆している。また、後者には「都 都は撰の義。一切の仏菩薩等を撰入すること」の注を加え、「都大道場」は「都・大道場」で、「私は今、ここに七日七夜を費やして」大壇場を建立し」の現代語訳があてられている。そこでは「都」が宙に浮いてしまっている。仏教史に暗い筆者が容喙できるわけではないが、鎌倉期写本に上記の如き付訓があるなら、言語状況と当代人の意識を勘案して、「大都」の反転語「都大」とみて、「我、今、七日七夜、おほよそ（都大）道場法壇の会を立てて」のような訓読はいかがであろうか。

Ⅱ 拮抗型

小松英雄氏は近著『日本語の歴史』（二〇〇一年、笠間書院）で、「一般に、同一の事物や同一の概念をさすふたつの類似した語形Aと語形Bとが同時期の同一方言に共存する場合には、①語形Aから語形Bに移行する過渡期にあるか、さもなければ、②語形Aと語形Bとが、意味や含みの違いで使い分けられているか、そのどちらかである。③単純なユレが長期間にわたって共存することは、事実上、ないと考えてよい。」（八三頁）と述べられている。これは正統的な語史の見解であり、なんら異を挟む余地はないが、こと漢語となると、すこしく緩慢なる変異を容認せざるをえないところがある。それは「漢語」が土着して列島言語となったといえ、「漢語」がもつ語性は相変わらず非和

列島漢語の字順定着について ―反転語を中心として―

語的性格を払拭できていないところがあるからである。同時に漢語が実生活から少しく遊離した知識人の修辞手段となつていくことにもよる。それはともかく、小稿でとりあげる五語について、『岩波国語辞典』（六版）と『新潮現代国語辞典』（二版）で調べてみると、「險難」「辛苦」「珍奇」「悉皆」「相互」の見出しはあるが、その反転は後書に「苦辛」が登載されているのみで、他の反転語は掲載されていない¹⁰。上記小松氏に従えば、①の移行が完了しているのが現況ということになるが、平安期頃はまさに拮抗移行状態というのが、上記の漢語である。「險難」「難險」はI型においてもよいが、この部に入れたにはすこしく理由がある。それは後述することにして、まず既刊辞書によると、「險難」について『大漢和辞典』は三世紀晋人陸機の例を、『漢語大詞典』は『楚辞』例を挙げている。その反転語「難險」について両辞典ともに出項されていない。『佩文韻府』にも用例をみない。『日本国語大辞典』は「難險」の見出しはあるものの、その出典をみない。「險難」は、仏典『法華經』を始めとして、唐代文献の慧琳『一切経音義』、『唐律疏義』（卷二）などに拾うことができる。列島文献にあっても『続日本紀』（卷六）を筆頭にして平安期の『往生要集』（卷上）、『政事要略』（卷八十二）、『本朝文粹』（卷六）、鎌倉期の『愚迷発心集』にいたるまで採拾できる。一方、「難險」も用例は少ないながらも（筆者の目録書が少なくかもしれないが）、漢土文献の劉肅『大唐新語』（八〇七年自序、卷九）、列島文献では『続日本紀』（卷三十五、三十八）、『智証大師将来目録』にみいだし得る。いささか武断的かもしれないが、この「難險」が漢土先行文献にみないとすれば、それはおそらく唐代に造語されたからであろう。その新造語が列島にいち早く受容され、『続日本紀』で「險難」（卷六・八）と併用されたと考えられる。両語も両用拮抗状態のようにみえたが、どうやら「難險」は「險難」

『玉葉』（寿永二年閏十月廿日条）・『平家物語』（卷五）・『鎌倉遺文』（一一二号、文治二年）にみいだせる。一方、「平安」はまさに平安期文献には頻見する。『九曆』（天曆四年五月廿四日条）『貞信公記』（天慶二年六月廿日条）の公卿日記、『今昔物語』（卷六・七）など多くをみる。もし辞書に字順規範が現れるとしたら、『色葉字類抄』に「平安」とあることから、この字順が優位であったといえよう。

「平均」「均平」も漢土文献では、先秦文献に在るが、列島文献となると、「均平」は平安期を待たねばならない。既刊辞書では中世文献『三国伝記』をあげるが、『政事要略』（卷廿五、延喜十七年）にみる。

現代人にとって「平和」は耳に近しい漢語であるが、平安期までの文献を調査すると意外なほどに採例がすくない。管見の及んだものは、『性霊集』（卷三）程度で、他に『長秋記』に元号論議に「平和」案が提出されたにすぎない。「平和」は『万葉集』卷十六以来、頻出する。『周易』（咸）の「天下和平」が、典故ある語句として強く影響をおよぼしたのか、韓土の『三国遺事』（卷二）『東文選』（卷五十二）や列島文献『本朝麗藻』（藤原有国）や『本朝世紀』（第六）にもみいだせる。朝鮮文献では『三国史記』（卷四十五）『三国遺事』（卷三・六）では「和平」のみが用いられているが、『東国李相国集』（卷三十、卷十九）『東文選』（卷一百十五、卷五十）では併用がみられる。また、「和且平」なる慣用化表現が『柳河東集』（卷十八）、『困学紀聞』（卷三）、『三国遺事』（卷五）、『東国李相国集』（卷三十）などにみるところから、「和平」が優位であることを示している。

Iに分類される「大都」は、現代では殆ど見いだされないものとなっている。副詞は時代好尚に左右される磨耗の著しい語なのかもしれない。劉堅・江藍生編『唐五代語言辭典』（一九九七年、上海教育出版社）に「大都」「都大」が収載されているところからみて、これらを

唐代語と考えている。一九四五五年の序をもつ張相の『詩詞曲語辭匯釈』（一九八五、中華書局）に「都大」が採録され、唐人元稹の例が挙げられているところから、だいたい以前から注目されていたことがわかる。近年にいたるまでの中国工具書では、ほとんど仏書をあげないので、補充する意味で紹介すると、「都大」は一行（七二七年没）の『大日經疏』（卷十）、澄観（七三八―八三九）の『大方広仏華嚴經疏』（卷十二）にも現れる。唐代流布語といってよからう。朝鮮資料でも、すでに崔知遠（八五八―？）の『孤雲文集』に「都大」が、時代降って『三国遺事』には「大都」と「都大」が同卷三に併用されている。近年刊行された檀国大学校東洋学研究所編『韓国漢字語辭典』では「百歩樓閣、台殿堂榭、都台雖微、勢皆活動」の「都大」を韓国（朝鮮）漢字語とされているが、漢土文献にみいだせるのであるから訂正すべきであろう。列島では唐代語を韓半島と同じく受容し、さまざまな文献に「都大」があらわれる。『新撰万葉集』・『千載佳句』（隱逸部、白楽天）・『和漢朗詠集』（下巻、山）・『本朝文粹』（卷一、源順）をはじめとして、『権記』（長保元年十二月七日条）・『永昌記』（長治二年正月廿七日条）・『平安遺文』（題跋編、寛治元年紺紙金字法華經）のごとき日記・記録、さらに安然の『観中院撰定事業灌頂具足支分』卷五や源信の『往生要集』卷下といった仏家の著作にも及ぶ。ところが、「都大」となると採例は稀少となる。『千載佳句』の「都大資無暇日、泛池金少買池多」（下、元稹作）がその唯一の例である。ただ列島人が用いた痕跡を強いて探せば、空海の『性霊集』（卷九）の次の箇所であろう。

我今此地者是我之地、我今欲立七日七夜、都大道場法壇之会、供養一切十法界、諸仏世尊、及般若波羅蜜多、諸菩薩衆、領諸徒衆、（高野建立壇場結界啓白文）

ただ友人の白居易には両語ともみあたらないようだ。また、同時代の慧琳の『一切経音義』では「辛酸」のみが採録されている。朝鮮文献で目録した例は、すこし時代が降るが、知訥(一一五八―一二二〇)の『高麗国普照禪師修心訣』に「辛酸」が、そして「酸辛」は李奎報(一二六八―一二四二)の『東国李相国集』と『東文選』(卷十一)から拾採できた。列島文献では「辛酸」が、すでに聖武天皇『雑集』にみいだせる。ただ「酸辛」は筆者の調査において遭遇することはなかった。ちなみに『日本国語大辞典』では室町期の『異制庭訓往来』『文明本節用集』例を掲出している。

初出文献に意をおく『日本国語大辞典』によると、「潔清」は『続日本紀』、「清潔」が『色葉字類抄』で、「潔清」のほうが、はじめに列島文献にあらわれたような印象となる。ところが、聖武天皇『雑集』にみえるところから、後出ではないことがわかる。平安末期の成立とされる『東大寺要録』には「潔清」(巻一・八)「清潔」(巻二・八)の両語がみえ、この語が用いられた文書年紀も共に八世紀中頃で、なにか両語拮抗という感がある。平安期にいたると、「潔清」が『延喜式』や『政事要略』(巻廿六)にみいだされるに對して、「清潔」は『江吏部集』(巻中)『政事要略』(巻廿六)を始めとして『往生要集』(巻上)『圖書寮本類聚名義抄』『文鳳抄』と広範に用いられている。とくに『政事要略』(巻廿六)の貞觀二年四月廿九日の同一文書に「尤欲清潔、如此供進、(中略)専令潔清」と、併用例がみえ、Ⅱ型の観がある。ところが、「清潔」は中世初期日記『玉葉』や『平家物語』に続き、あまつさえ「清クイサ清ヨキ」(『打聞集』)のごとき訓読語があらわれるに至っている。やはり「潔清」は有標的漢語であつたと考えられる。このような状況は漢土でも同様であつたようだ。「清潔」「潔清」ともに漢代文献にみえ、降って唐代に及んでも、韓愈の如く「和崔舍人詠

月詩」で「清潔」を、「答李秀才書」で「潔清」をもちいている。「潔清」は『敦煌變文』(巻四、八相變)や宋代文献『夷堅志』(乙志卷十八)に例がある。

「莊嚴」の反転語「嚴莊」は、すでに『管子』形勢解の例が『大漢和辞典』『漢語大詞典』に登載されている。贊寧の『宋高僧伝』(九八八年)では「莊嚴」の優勢のうちに一例だけ「嚴莊」(巻十二)が存するところを見ると後代にも劣勢ながら生き続けたようだ。程湘清編『隋唐五代漢語研究』(一八頁、一九九〇、山東教育出版社)では『維摩詰經講經文』(敦煌變文所収)例をあげている。列島においても「嚴莊」は劣位で、わずかに『田氏家集』(八九一年)に「十方淨土悉嚴莊」とあるのみである。字形は異なるものの、ほぼ同用された「嚴粧」がある。朝鮮資料『東国李相国集』(巻四・十六)にあり、列島文献でも『本朝無題詩』(巻八、藤原季綱)や『千載佳句』(章孝標)、『和漢朗詠集』(下巻、曉)に、そして院政期の『梁塵秘抄』にも、その例を拾うことができる。その反転語「粧嚴」も『政事要略』に「灑掃粧嚴」(巻二十八、承知十三年)とみえる。当該期に以上の例を採拾できても、「莊嚴」の圧倒的優位に及ぶべくもない。³⁾なお、『圖書寮本類聚名義抄』に「装嚴」の割注に「嚴装」をみるも、列島文献では他例をみない。

前部要素に「平」をもつ「平安」「平均」「平和」が、現今の字順として定着している。もつとも近年「和平」が「平和」と併用されるようになった。ただし、「均平」「安平」の用例をみない。漢土文献では、戦国末期の『韓非子』に「平安」「安平」が両用されているが、列島文献にあつては、『角川古語大辞典』で『日本書紀』天武紀九年十一月条の「安平」をのせる。当該箇所の「安平」は、病氣平癒の意味である。ただ「安平」はその後の文献にあらわれることが稀で、後代の

された列島漢語の史的考察にある。とりわけ、「容貌・貌容」「言語・語言」のごとく、字順を反転させる漢語群に着目して、その字順が今日のように定着したのは、何時ごろからなのか、またその言語内的、外的因由は何か傾斜している。言語外的理由に依存することの多い所謂名詞並列構造の漢語について、すでに稿をなした。⁴⁾それに引き続き、二字漢語のうち、ともに形容詞（形容動詞を含む）及び副詞の例をとりあげてみたい。筆者は、列島漢語史の時代区分目安として、平安以前・以後を想定しているので、小稿の扱う列島漢語は、平安末期（過渡期として鎌倉初期を含む）までとする。

一 史的にみた反転漢語の分類

奈良期から鎌倉期にいたる約五〇〇年間の反転漢語のうち、そのタイプを分類化すると、ほぼ次のようになるうか。すなわち、この期間を通して一方の字順が優位（無標）で、他方がごく稀にあらわれる通時代型（Ⅰ）、両形が対抗している拮抗型（Ⅱ）、中世以降現在に継承され字順の後発型（Ⅲ）の三類である。筆者の採摭した例の主要なものを挙げてみよう。ただし字順は便宜的に現代国語辞典などで見出し語となっているもので掲出する（「大都」は現今ほとんど目録すること稀となっているが、ひとまずここにおくことにする）。

- Ⅰ 苛酷・苦痛・辛酸・清潔・莊嚴・平安・平均・平和・大都
- Ⅱ 險難・辛苦・珍奇・悉皆・相互
- Ⅲ 暗愚・健康・峻嚴・明朗

このうち、「大都」「悉皆」「相互」が前・後部ともに副詞からなり、他は両部ともに形容詞（所謂形容動詞も含む）からなる漢語である。

Ⅰ 通時代型

この型に属する漢語字順は上記順が現今でも一般的であろう。ただ「苦痛」の反転「痛苦」は現代語用例に見かけないわけではないが、やはり特殊（有標）であろう。

まず「苛酷」であるが、当該期間の殆どの文献でこの字順をみる。『政事要略』（巻五十一、貞観二年九月二十九日）『続本朝文粹』（巻二『小右記』（治安三年十二月廿三日条）『吏部王記』（天慶九年九月十日条）『色葉字類抄』などにみえる。それに対して、「酷苛」は日本刊行辞典では登載されず、中国の『漢語大詞典』に清代文献の掲出があるのみである。ところが、わが国文献『続日本紀』巻二十八、神護景雲元年六付辛巳条に「存心名達、檢括酷苛」とある。八世紀末の列島文献にみえるところからすると、あるいは漢土文献を精査すれば用例が検出されるかもしれない。ただし筆者の採摭したのは、ただこの一例のみであることからすると、きわめて稀な用例ということになるうか。

「苦痛」と「痛苦」は、中国文献『敦煌變文』（年紀のあきらかなものからすると十世紀、すなわち唐代末期から五代の資料となる）などでは、両語両用という観がある。

見君苦痛、割妾心腸（巻二、韓朋賦）

痛苦之哉、誰復能忍（巻二、伍子胥變文）

一方、列島文献では「苦痛」よりも「痛苦」（万葉集巻十七）がはやく姿をみせるものの、「苦痛」は常に優位を保ち、『十住心論』（巻二）『往生要集』（巻上）をはじめとする各書にみいだされる。

「辛酸」「酸辛」を両用したのに元稹（七七九―八三二）⁵⁾がいる。

辛酸 聞者辛酸（巻六）

酸辛 酸辛犯葱嶺（巻十三）

列島漢語の字順定着について

—反転語を中心として—

猿田知之

はじめに

嘗て、佐竹昭広氏はある会談で次のように発言されたことがある。
「明治漢語の問題は、たんに日本漢語史の問題であるばかりではなく、日本人の精神史の問題としても、今後本格的な研究が行われるべき未開の分野であろうと思います」^①。後者の指摘はひとまず擱くとして、前者については、その後貴重な成果をみるに至った。田島優著『近代漢字表記語の研究』（一九九八年、和泉書院）、陳力衛著『和製漢語の形成とその展開』（二〇〇一年、汲古書院）などがそれである。ただ、両氏の研究成果にもいささかの不安と不満を払拭できないところが残る。例えば、田島氏は「瑞祥」は「祥瑞」に比べて明治期頻度が低かったようだ（三七〇頁）とされるが、そうなると、前代では「瑞祥」が一般的かという疑問が生ずる。筆者の調べた限りでは、「祥瑞」は『日本書紀』（卷廿五）『続日本紀』（卷三十二）に見られるが、「瑞祥」は、すこし降って『日本文徳天皇実録』（卷九）『日本三代実録』（卷廿九）にあらわれる。特に『延喜式』卷二には「祥瑞」物が詳しく掲載されているのである。また、陳氏は、日本製漢語として、「簡単」「健康」「相互」「解却」「自分」「着到」「乱雑」「乱闘」「乱入」「慮外」

などを挙げられている。しかし、そのなかにも容認に躊躇をおぼえるものがいくつかある。例えば、「自分」は、村上春樹氏が日本製漢語と指摘して以来、^②異論なく今日にまで至っている。ところが、管見の及んだところによれば、南齊の陸泉『繫觀世音應驗記』（五〇一年）を始めとして、『王梵志詩』^③或いは慧超（？一八五〇）の『往五天竺国伝』に、さらに時代降って、宋の洪邁『夷堅志』乙志卷一（一一六六年）・支景卷五にも見いだせるのである。「着到」についても、原文にあたってはいないが、石川重雄編『宋元釈語語彙索引』（一九九五年、汲古書院）に「著到」とともに登載されている。また、「乱雑」は江戸時代によく読まれた『文章軌範』（柳宋元・韓退之の文）で容易に検出可能である。前出書『夷堅志』補卷二十二にもみえる。「乱入」は確かに中国文献で目撃するは稀れなのかもしれないが、朝鮮漢文資料『東文選』（卷六）にその例を見る。従って、陳氏の指摘も再考を要することになる。

ともあれ、田島・陳氏らの研究から、列島漢語研究においては、まず列島文献を通しての史的研究と朝鮮漢文資料を包含した漢文文献資料の研究が必要であることを痛感する。

さて、筆者の興味は広袤万里ともいうべき漢語研究の、極めて限定